冤罪死刑殺人事件
藤田傳

三一書房

黒念佛殺人事件 藤田傳

三一書房

黒念佛殺人事件　　定価 850 円

1971 年 7 月 31 日　第 1 版第 1 刷発行

著　者　© 藤　田　　傳

発行者　田　川　敬　吾
1971 年

印刷所　第一印刷株式会社

製本所　東京美術紙工

発行所　株式会社　三　一　書　房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9
電　話 03（291）3131～5番
振　替　東　京　84160号
郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえします

0093-712037-2726

●目次

黒念佛殺人事件――――3
かくし念佛探索行――――173

装帧　秋山法子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

黑念佛殺人事件……　三幕

登場人物

黒河内レン　六十八歳
タカ　四十五歳
徳三　四十三歳
チノ　二十歳
（川崎の女と同一人物）
水沢　松子　三十五歳
須藤　嘉吉　五十五歳
鶴造　五十歳
宇太郎　三十三歳
久子　三十一歳
兼八　四十一歳
芳三　四十歳

他、村人多数

白戸　検事　三十八歳
酒巻　刑事　四十歳
道下　刑事　三十六歳
井沢　刑事　三十四歳
鑑識員
神代　巡査　二十五歳
牛町五兵衛駐在　四十六歳

他、捜査班数人

川崎の女　二十五歳
男

●第一幕

へ俺家の三太にゃ、仏がつかぬ
一昨年（おととし）　去年と今年でみたび
父ちゃん　母ちゃん元気をもんで
今年は頼むと言ったれば
三太がブツブツ言うことにゃ
――お知識だますはやすけれど
仏になったら　もうモチ喰えぬ
アキレタヤツダヨ！
マッタクダーヨ。

高橋梵仙著「かくし念仏考」より・高野善一作

舞台。黒河内家母屋。深夜。

部屋の細部は闇の中に不明。僅かに部屋の中央の囲炉裏から残り火らしい煙が上がった、人の気配もなく静寂な、暗い舞台である。

突然、物音と共に影が駈込んだ。

ランプの灯に部屋がボーと明るくなった。

——影は徳三だ。

徳三はランプを吊ると、囲炉裏の横を凝視し、呆然と立ちすくんだ。

徳三　姉ちゃ……姉ちゃ!!

注意深く部屋の隅々を窺う。

と、猛然と動いた。隣の部屋に飛込み、転がるように出て来ると、部屋中を蹴散らし、手当り次第物陰を窺った。と、急に動きが停った。非常に怯えて、左手を恐る恐る視た。

徳三　母ちゃ?!……。（やっと声になった）

レンが音もなく左手の土間に立っていた。

徳三　何処さ運んだ……何処さよオ……。

レン、無言で部屋に上がると囲炉裏の横に坐った。

徳三　葬いもすねえで、姉ちゃ何処さやったんだア……こった夜中に、すかもこった雪ん中さ……姉ちゃ可哀相だど……。

依然、レンは沈黙を続けた。
女の泣声のような風が吹き抜けた。

徳三　……こった雪ん中じゃ……こった雪ん中じゃ……。

レンの言葉を待てず立上がって外を見た。
——再び、風が舞った。

徳三　姉ちゃ！

土間に飛び下りると、左手の戸に走った。

レン　徳！

徳三　（無言で停った）

レン　この家にゃ俺ァとお前すか居ねえだ。

徳三　……母ちゃ……。

レン　他ァ、誰も居ねえ。

徳三は長い間、レンを眺めていたが、やがて部屋を見廻した。ランプの灯に薄暗く照らされた部屋が、風の中に浮かんでいた。徳三は一歩一歩囲炉裏に近づいた。

徳三　（大声で叫んだ）なすてよ！　……なすてえ!!

その場に蹲った。レンが残火に薪を投じ、煙が動いた。風だけが舞っていた。

——時間が流れる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「昭和四十年三月二十一日」

午前九時頃である。部屋の中は、灰色の空の下、昼間も暗い。

レンも徳三も、その儘であった。

外で異常に大きな音がして数台の車が止まる。徳三はその音に反射的に動いた。

牛町　徳三。

声と同時に初老の警察官、牛町五兵衛が、十人近くの制・私服の警官を導いて入って来た。徳三の自首に急遽編成された白戸検事、酒巻主任刑事を中心とした殺人事件初動捜査班の連中である。徳三はその牛町の前に居た。

酒巻刑事　死体は？

徳三　……?!

酒巻刑事　死体（ほとけ）は何処さある?!

徳三　ねぐなりやんすた。

酒巻刑事　ねぐなった？

徳三　刑事さ、早ぐ俺ァふん捕めえてくれよ！　姉ちゃ唯、ねぐなっただけでねえすか。

酒巻刑事　ねぐなったって、怪すな話でねえがよ。殺さえだ屍体が一人っこすて歩いて消えるかい？

徳三　だども……嘘でやねえ。本当だも。刑事さ。

酒巻刑事　（牛町に）駐在さ来たのは何時頃だ。

牛町　二時八分ですだ。その場で本署さ電話いたしやんすた。

酒巻刑事　姉さん殺すて、どの位たって駐在さ行ったんだ？

徳三　直ぐでがす。

酒巻刑事　此の雪だばなんぼ走っても此処から磐沢まで一時間はかかるべェ？

牛町　んでがすなァ。

酒巻刑事　一時頃かァ……何処で殺すた？

徳三　（囲炉裏を指した）

酒巻刑事　そこで?!

徳三は部屋に上がると囲炉裏の横に立った。そして呆然と足元をみつめる。その横に

は無言のレンが居た。

酒巻刑事　おふくろさんでやんすか。昨夜何処さ居やあんすたか？

徳三　母ちゃにゃ何の関係もねがす！

レン　……此処。

酒巻刑事　何すてやんすた。

レン　寝でいだす。

酒巻刑事　寝でいだァ？　何時頃から？

レン　村じゃ誰もが、日ィ暮れっと寝るのっしゃ。

井沢刑事　おいおい、息子は昨夜、此処で人を殺すたと言ってるんだぞ?!　……えッ婆っさま。

レン　知ゃねがす。

徳三　俺ァ連れで行げばそれで済むでねがすか！　姉ちゃはもう死んでるんすから、なァ、駐在さ！

白戸検事　そうはいかんのだ。

徳三　なあすてでやあす？

牛町　困るなあ、徳三。

徳三　駐在さ、なあすてや。

牛町　そいが戦後の警察なんだよ、徳三。加害者の一方的な証言だば、罪にゃならねえんだ。

徳三　（何か言いかける）

牛町　だがいってえ、なすて姉ちゃを殺すたんだ。ついこの間も、二人すて山の粗朶伐っていたじゃねえかよ。

酒巻刑事　え?!　牛町君、そりゃあいつ頃の話すだ？

牛町　去年の暮頃だったすべえ。なァ徳三。電力会社の人達と乳張峠さ登った時。橇っこ曳いて、タカさとこの徳三が……。

酒巻刑事　タカ？

牛町　この人が殺すたと語っている姉ちゃですよ。たすか、二人で橇っこ曳いて戻ってくるところだったなァ。

徳三の身体が瞬時に緊張と興奮に漲った。然し、言葉にならず異常に慄えただけだった。捜査班の顔がその徳三を注目した。漸く、酒巻刑事がその徳三の前に立った。

酒巻刑事　姉ちゃをなぁすて殺すた?!

徳三　（低い唸り声が洩れた）

酒巻刑事　昨日の夜中に何があった?!

徳三はレンを凝視して懸命に何か耐えていた。——何処かで風が泣いていた。

徳三　チノおう！

徳三は遂に耐え切れなくなって叫んだ。悶えるように転げて部屋の片隅に走る。

酒巻刑事　チノ？　誰だ?!

牛町　（首を振った）

白戸検事　（暗い片隅を見て）牢屋じゃないのか、これは?!

酒巻刑事　おーい！　電気！

捜査班の面々の活動が開始された。

白戸検事　牛町君、これは座敷牢なんだろう。

牛町　はい、そうでがす。

家の外で発動機が始動した。急激に光が走った。

光源をもった制服が数人部屋に駈込んで来たのだ。

酒巻刑事　こっちだ！

照明器が座敷牢を照らし出した。徳三の顔が格子の間に浮かび、この突然の光線に空虚な視線を泳がせていた。この異常な出来事の中で、本家、黒河内家の母屋は落着いた古い歴史を残して静かに在った。一本一本の柱にも酷寒の中に耐え続けてきた部落の姿があった。

酒巻刑事　婆さま、この牢はいつ頃からあったえ？

レン　……さあ。……わがらねえ。古いもんでがす。

酒巻刑事　誰を入れてだ?!

レン　……。（ただ首を振るのみ）

牛町　この部落は、私が磐沢の駐在さ来た頃までは、どの家もこったな座敷牢があったもんでがす。未だ十年も経ってねがすなあ。昔はよく村に気違いが居ったらすいンですが、……近頃ンなってどの家も牢屋を壊す始めてなす。磐沢じゃ米っこ入れる倉代りにすている家もあるくれえでなす。ハハハ……。街から乳張峠越えで仏ヶ浦さ、自動車が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com